

◆稲生亜沙紀(3年) Asaki Inou

J. ブラームス：ピアノ協奏曲 第2番 変ロ長調 作品83 (演奏時間約50分)

1987年千葉県生まれ。東京芸術大学音楽学部附属高校を経て、現在東京芸術大学器楽科3年在学中。霧島国際音楽祭にて特別奨励賞、優秀演奏賞。オーストリア、ザルツブルグ夏期セミナーにてハンス・ライグラフ氏のクラスを修了。第1回Miyoshi NetピアノコンクールF部門第1位。第17回やちよ音楽コンクール第1位、市長賞。これまでに楠原祥子、小林仁、G. タッキーノ、伊藤恵の各氏に師事。

ヨハネス・ブラームス(1833-1897)は、2度目のイタリア旅行にでかけた1881年の早春、燦々と降り注ぐ太陽の光、そして建築や絵画など数々の素晴らしい作品に触れて、この協奏曲を着想する。

同年11月ブタペストにて、彼自身のピアノ独奏で初演。師であるエドゥアルド・マルクスゼンに捧げられている。

「かわいらしいスケルツォを持った、小さな協奏曲を書いてしまいました」と彼は残しているが、この曲は数々のピアノ協奏曲の中でも最も長大な類に入る。そしてかわいらしいと言ったスケルツォ(第2楽章)は非常に情熱的で、難曲として有名になるほどの高い技術を要求される。彼は生前、逆説的な表現を好んでよく使っていたらしい。

口下手な彼は音楽で人々に語りかけた。彼の音楽はいつも愛に溢れ、情熱的で、また時には淡々と語り、静かに歌った。この曲は、彼の音楽の魅力が余すところなく表され、そしてシューマンへの尊敬の思い、シューマンの妻でありブラームスの心の支えとなったクララへの憧れや愛が込められている。

第1楽章 Allegro non troppo 変ロ長調 4/4拍子 協奏風ソナタ形式

ホルンが奏でる牧歌的な第1主題に続き、緊張感を持ったピアノソロを経て、tuttiにより堂々とした提示部に入る。低弦のピッツィカートによってヴァイオリンが奏でる第2主題は、柔和な表情を持つ。短いカデンツァを経て、終結部ではピアノとオーケストラの一体感が増し、力強く締めくくる。

第2楽章 Allegro appassionato 二短調 4/3拍子 三部形式

スケルツォ特有の軽快さよりも、暗く情熱的な曲想が全体を支配する。

ピアノで示される激しい第1主題に対し、弦楽器による第2主題は静寂の中で叙情的に歌われ美しい。

第3楽章 Andante 変ロ長調 4/6拍子 三部形式

主題をチェロが朗々と歌う。ブラームスは自身の重厚な響きの中に、イタリアの明るく優美な情感をこめた。中間部ではPiu Adagioに速度を落とし、クラリネットとピアノが深い静けさの中で絡み合う。天へと昇っていく光のような響きで静かに終わりを向かえ、ほとんど切れ目なく4楽章へと続く。

第4楽章 Allegretto grazioso 変ロ長調 4/2拍子 ロンド形式

舞曲のような、明るい曲調で始まる。軽やかに移り変わる曲想の中での、ピアノとオーケストラの対話が特徴的。冒頭のメロディーが緩やかに回想された後、コーダに突入し華やかに幕を閉じる。

(稲生 記)